

DOJIN  
**R18**  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

# Agent Game

# Palette Enterprise.



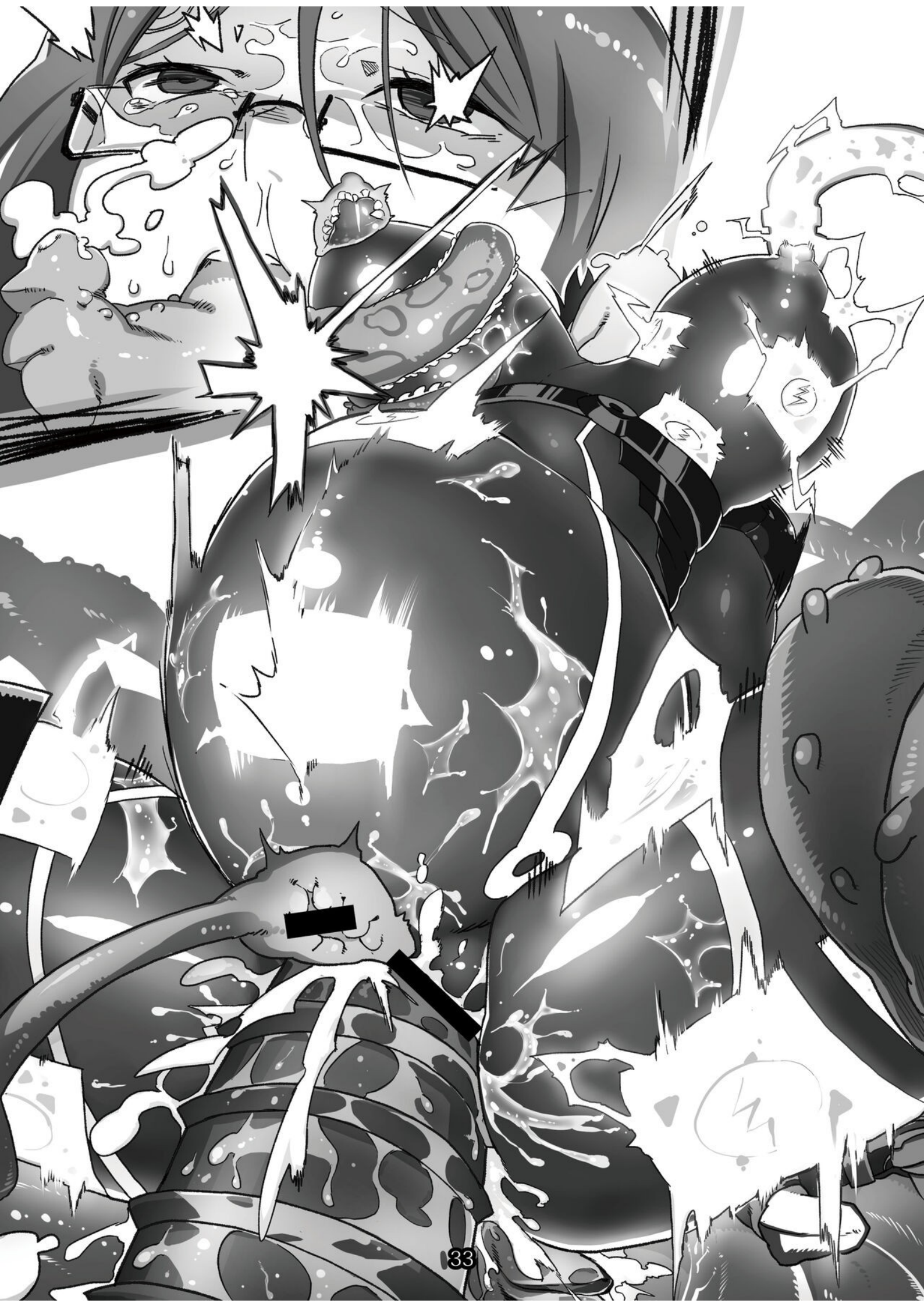




















政府の求めに応じて深山から降り、エージェントとなった退魔の巫女御門静音。その初戦となるべき戦いは生物ラボで発生した淫魔ハザードの対処であった。淫魔化した馬や牛があふれる研究所に単身織り込んでいく。静音も神道退魔流の術を尽くして闘ったがまだ実戦経験の薄い巫女にとっては荷が重すぎる任務であった。

闘いやすいよう身体に密着するよう改造された純白と漆黒で彩られた改造巫女装束ごと淫裂を濡れてもいないのに淫魔馬の超極太で触手でぶち抜かれた。

「んおおおおおっつ…!!!」

しかし静音の纏う神気でも中和できない淫気のおかげで感じたのは痛みではなくて壮絶な快樂だった。腹をスーツごと突き上げられる度に壮絶な快感が全身をバラバラに粉碎するほどの勢いで駆け抜けていく。更に媚毒射精まで喰らって胎内をパンパンにされて絶頂する。退魔エージェントの巫女は完全に敗北した――



馬淫魔に犯され抜いて戦闘能力を失った巫女エージェントの次なる相手は、淫魔化した牛であった。その体軀は異様なまでに巨大で、一軒家の屋根程までは身長がある。

触手逸物も股それに似合った超極太で、静音の胴体ほどはあろうかという大きさであった。

触手で細い胴を鷲づかみにし、その超弩級極太触手を無理矢理小さなおまんこに埋め込んでいく。その様はまるでオナホールを使っているようであった。

「おおおおおおお——っっっっっ  
さっけ、さけるううっっっ 儂の身体真つ二つになるうううっっっ」  
そして身体ごと上下に揺すぶられる。その度に極太逸物が腹を突き破らんがばかりに子宮内壁を押し上げ、漆黒の巫女スーツごとお腹が胸元まで突き上げられる。

そんな責めでも感じてしまい、おぞましい淫拷問絶頂に身を震わす。巫女少女の初陣は陰惨な結果に終わろうとしていた。



身体に貼り付き豊満なボディラインを露わにする漆黒のライダーズーツに身を包んだ黒髪の美女エージェント、朱鷺羽瑞穂<sup>ときほみずほ</sup>。彼女は愛車の大型バイクを駆って各所に同時発生した淫魔を退治していたが、ふとした油断から濃厚な淫気にまどわりつかれ愛車が淫魔と化してしまった。触手と化したバイクのタイヤが乳首にはまり、勃起を強制してくる。まもなく乳突起はビンビンにそり立ち、淫液にまみれたタイヤで乳首をなぞられる感触だけで絶頂するほどになる。

さらに股間には大型のスパイクタイヤを思わせるようなタイヤ触手がぶち込まれていた。膣内を高速回転で抉りながら。子宮内部をも擦り上げる。

「ああおとおおっっっ三 おおおっっ三」

成熟した大人の女性だけが持つ濃密な色気を振りまき、黒髪を振り乱してイキまくる瑞穂。歴戦のエージェントである彼女であっても耐えがたいほどの壮絶な快美感と絶頂の前に、なすすべも無くメスに変えられていた。



完全にグロッキーになった瑞穂はもう淫魔バイクの思うがままだ。ライダースーツの美女エージェントはバイクの座面に跨がらされた。シートにはピストンを横したような彼女の頭ほどはある超極太触手が生えており、当然それを飲み込まされるハメになった。形状通り強烈なピストンで子宮を抉られ、背も折れよと身体をのけぞらせて発情汗を振りまきながら絶頂する瑞穂。

淫魔バイクはなんとそのまま荒れた路面を走行したのである。

「んひっっ…ひいひいひっっ…」  
右に左に車体が傾き、段差を乗り越上げたりする度に膣や子宮の思いも掛けないところが抉られてその度に予測できない絶頂が襲いかかってくる。

かといってこの高速で走っている淫魔バイクから振り落とされては死は免れまい。滑稽だとわかっていてもハンドルを握らざるを得なかった。死の恐怖と隣り合わせに送り込まれてくる快感は股格別で、ダメだとわかっていても絶頂してしまう。淫らなツーリングは燃料が尽きるまで続く――。







キ  
キ  
キ



東京都のとなり、一つの県を丸々学園研究都市に改革した地域があった。その名も『中央研究学都へキサゴン』。その名の通り土地の形は六角形になっており。その頂点部に日本を代表する会社の生物学、工学、物理学といった研究所の摩天楼のようなビルが林立し、中央に巨大な学園都市『五角市』が築かれている、という特殊な都市であった。この年で生み出される発明、特許は毎年数千件にも上り、まさに日本の頭脳の中核とも言えた。

時を同じくして日本は異次元から現れる謎の生命体、『淫魔』の存在に頭を悩ませていた。無差別な破壊活動、女性を犯し生命力を奪い取るという残虐さ、そして高位の物には人間に喰い込んで利益——あるいは何らかの目的——を達成しようとする物すらいた。もちろん政府も手をこまねいていたわけではない。警察、公安調査庁、防衛省などが躍起になって日々退治に明け暮れ、高位淫魔の陰謀を暴こうとしている。そんな組織の中に特に高度な隠密性を要求された部署が設立された。その名も『内閣府特殊生物災害対策室』、通称I機関。ここに所属するのは大半が秘密工作活動に従事するいわゆるスパイの役目を担っていた。各研究所に潜り込み、淫魔と人間との癒着を暴く、そんな危険で重要な任務に就いているのだ。表面きは通常の警察力では対処できない淫魔を殲滅するためのエージェントを置く部署となっており、その方面でも一流であった。

そんな隠密任務に就く彼女たちの危険な任務が、今始まる——。

## 目次

エージェント・鷹野瑠理 (挿絵：masa)	: 4P-17p
エージェント・桃ノ木愛理 (挿絵：鈍色家電)	: 18P-33P
エージェント・高坂真利愛 (挿絵さづかかずき)	: 34p-39P
エージェント・御門静音 (挿絵：DON)	: 40P-41P
エージェント・朱鷺羽瑞穂 (挿絵：トコビ)	: 42P-43P
エージェント・榊百合亜 (挿絵：ズンダしぼん)	: 44P-49P
奥付	: 50P

小説：全て「高橋良喜」

表紙：masa

裏表紙：鈍色家電

古くから伝わる魔術師の家柄に産まれ、自らもまた高位の魔術師としてその世界でも名を知られた鷹野瑠璃が、今淫魔対策に躍起になっている日本政府に招聘されたのは当然の成り行きと言えた。齢17にして与えられたポストは『内閣府特殊生物災害対策室特別調査官』。淫魔犯罪に関するあらゆるアンダーカバーな対抗活動を行っていく組織であった。

瑠璃が着任してから大小いくつもの事件があり、その全てを裏面から密かに、そして鮮やかに解決している。

「……………」

ペンタゴンの一角を担う五見製薬研究所バイオラボ。

そこに彼女の姿があった。LED蛍光灯に照らされた彼女の顔はメガネの下のぱっちり開いた利発そうな目とスツと通った鼻筋、そして健康的なサーモンピンクに薄くりップクリームを塗ってきらめく唇を映し出している。どれをとっても美少女の及第点を平均を遙かに超えて満たしていた。

全身をピツタリと包むレオタード状のボディスーツに身をまとっているのだ。軽い光沢を放つ薄紫色のスーツは少女の首元から胴体はもちろん、両腕、両脚までをも隠していた。胴体には魔術の流れを示す蛍光色に薄く光るラインが無数に引かれている。足は黒く塗られた地下足袋のような、音を立てにくく地面を直接つかめるような構造になっている。両手には手の甲に大きな魔術刻印が彫られたメダルが取り付けられている。腰の後ろには二本の大ぶりのナイフが指されており、そのほかにも太股部分に投げナイフが何本も装着されている。

全身をあまりにもピツタリと覆うが故に瑠璃の魅惑的なボ

ディラインが丸見えだった。レオタードに包まれてもなお自己主張激しく天を仰いでツンと上向く乳房は制服よりも締め付けが緩いせいかより一層大きく見える。そこから下に目をやればきゅつとくびれたS字ラインを描くウエスト、やや堅さが残る物の美しい曲線美を描き出すヒップがみてとれる。特に乳房と股間にはサポーターのような物が無いのか、乳首のかすかな陰影がレオタードに浮いて見えているし、股は土手の膨らみまで丸見えだ。

そして下半身は鍛えられているのであろう引き締まって野生動物のようなしなやかさを感じさせる太股からふくらはぎ。

何処をとっても均整の取れた美しい肢体である。

彼女は今五角学園都市に蔓延する麻薬『レインボー』を追っていた。これをキメれば女はイ来っぱなしになって天国を見られ、男は絶倫になり何度でも射精の快感が味わえるといううたい文句だ。この麻薬は依存性が非常に高く、一度でも使えば足抜けすることは難しい。そうなったジャンキーの行き着く先は年中イキっぱなしの色狂いか廃人である。それならまだいい方で、噂では淫魔に変貌してしまったという報告まである。

問題の麻薬を詳しく分析したところ。人間の科学力ではどうしても説明の付かない成分が混じっていることが判明した。間違いなく淫魔の分泌液から取られた成分が混入している。

その線から捜査を進めていった結果、一人の高位淫魔の存

在が浮き彫りになった。その名は『ゼロ』、数々の淫魔と人間が絡んだ犯罪に手を貸していると内閣府特殊生物災害対策室でも最重要指名手配している淫魔だ。

彼女は今、そのゼロと対峙していた。魔薬の生成を行っている研究所を突き止め、忍び込んだところ奴が居たのである。殺すわけにはいかない。こいつには聞きたいことが一杯有るのだ。だが。

(半殺しぐらいなら問題ないわよね！)

口の中で呪文を圧縮詠唱して威力を高めると、魔術メダルがはまった手袋をゼロに向けて突き出す。

「ガンドっ！」

人差し指から高度に圧縮された魔力の塊が発射され、ゼロめがけてとんだ。触手を引きちぎりながら。脇腹に命中する。外套の脇が破れ、大きく抉れた。そこから覗いた地肌は無数の触手の束によって構成されている。切断面から怪しげな粘液を吹き出しながらも、即座に新たな触手が空間を埋めていった。

「ぐっ……なかなかヤルじゃないか？ そんな小娘の牙を抜くのもまた楽しいものさ！」

(ガンドが効いてない!?)

ガントはだだの魔力ではなく呪いの一種である。まともに食らえば身動きすらとれないはずだ。しかし相手は平然としている。そういうとゼロは先ほどよりも更に大量の触手を床を這うようにして放ってきた。その圧倒的な量は肉の洪水とも呼ぶのがふさわしいほど。

それを高く跳躍し、空中でぐるりと一回転して天井に張り付いた。魔術を乗せた足袋のようなブーツはしっかりと張り付いて落ちることはない。そこで再び

「ガンドっ！ ガンドっ！」

今度は二連射、威力も倍だ。術は狙い変わらずゼロの両腕を引きちぎった。

だが相手は相変わらず蛙の面にしょんべんといった風で全く効いていないようだった。

「ボクの触手はね、アースの役割もしているんだ。魔術をマナに変えて地面に逃がしてしまえるんだよ」

「くっ……」

瑠璃は歯ぎしりした。こうなったら危険だが賭に出るしかない。(奴の身体に密着して。直接魔力を流し込むっ！)

そう決心した瑠璃は天井から一気に急降下し、腰に差しつけた魔術刻印入りナイフを抜いた。

圧縮愛称を唱え。稀薄の叫び共にナイフに込める。

「はああああああああっつつつつつ!!!」

空から舞い降りるツバメの如くゼロの身体に飛びかかった瑠璃はナイフを脇腹に突き立てた。

レオタードに入った魔術ラインやナイフの魔術刻印がまばゆく光るほど魔力を送り込む。

「やっと、近くにきてくれたね。ここからは根比べだ。ボクが君の魔力に屈するか——君がボクの与える快楽に屈するか。レインボーはね、霊力や魔力の高い女性の愛液があると純度と効

果が増すんだ。君が負けたらレインボー精製のための愛液供給肉奴隷になってもらうよ……」

そう薄ら寒い事を言う懐に飛び込んできた魔術師の少女を可愛がるべく触手を伸ばした。

「くっ……」

全力に近い魔力を乗せてナイフの柄を両手で握っているために身動きが取れない。なすがままにされるしかなかった。

まずネットネトした粘液がまぶされた触手がご挨拶に来た。レオタード越しに荷もロケット状に着き出した豊富な乳房に根元から巻き付いていく。

「!?」

その瞬間、じゅうつと皮膚を酸で焼かれるような熱さが乳肌

に走った。  
(!? 媚薬! まさか、この防護衣の魔力循環は完璧なはず……!)

魔力防壁が展開されて水一滴通さないはずの布地にあっさり  
と粘液が染みこんできたのだ。淫魔の魔力を越えた底知れぬ恐  
ろしさに戦慄するしかない。

「所詮科学も魔魔術も『人間の英知』にしか過ぎないさ。なら  
女を泣かせる淫魔がそれを乗り越えられたって不思議じゃない  
だろう?」

そういうとゼロの触手はぐっちやぐっちやといやらしい音を  
立てながら乳房を揉みこね始めた。あつという間に乳芯に媚薬  
が浸透し、燃えるように熱くなる。

巻き絞められる毎に張りを増す乳房は元々ロケット状だった

おっぱいを砲弾状にまで捻り上げていく。  
「くっくっ……!」

そうされると胸の中で切ない疼きが充満した。そのままぐに  
ぐにとパン生地を揉み捏ねるように揉みまくられれば、口から  
「あ、あはあ……あ……」

と湿った吐息がこぼれだしてしまふ。胸が蕩けそうなほどの  
悦感が早くもわき起こり、強く締め上げられて触手を食い込ま  
される度に悦びの疼きがどうしようもないほどにわき起こる。  
視界が一瞬フラッシュアウトしかけた。

さらにただの肉縄とは思えない程の巧妙さでねじり上げ、揉  
み込み、くびり出される。

「うあああああ……はあああああ……」

体中の汗腺が開き。スーツの下でぶわつと仄香る玉のような  
汗が噴き出した。それはすぐに吸湿性に優れた布地に吸い取ら  
れて外に放出され、あたりに濃厚な牝香を漂わせていく。

「まだ揉んでいるだけで、ずいぶん喘ぎぶりだな。ナイフ  
から手を放さないように気をつけるよ?」

そういつて薄く笑う。

乳房の頂点では粘液と汗に濡れまみれたレオタードに貼り付  
いてくつきりとその姿を現す乳首が完全勃起していた。そこを  
見逃すようでは淫魔ではない。

ザラザラした猫舌に更に大きな粒を混ぜ込んだような触手の  
先端が挟み込むようにしてコリコリと扱き上げてくる。

「かふっつっつ!!! んんむううんっつっつ……!!!」

乳頭で耐えがたいほどの痺れが炸裂し、乳芯に甘い衝撃を伝

えてくる。クキクキ。コキコキとまるでレバーでも操作するよう  
に上下左右に折り曲げられれば、痺れは倍増して壮絶なまでの  
乳悦を伝えてくる。

さらに表面に生えたザラザラを活かすようにしごかれれば、  
殆どボディペイント同然の極薄スーツはその刺激を全く緩和す  
ることなく勃起しきった乳首に伝えてくる。まるで無数の歯に  
甘噛みされるような圧迫感と擦過感に心臓が止まりそうなほど  
の快感が押しよせてきた。

(だめっ……ここで負けたら、ゼロの肉奴隷にされる……！)

瑠璃はありつたけの精神力と魔力を動員してナイフの柄をを  
握りしめ、更に土手っ腹奥深くにねじり込む。

「ぐっ!!! そうだ、そうこなくちゃいけないよ。簡単に屈服し  
てしまうようじゃ面白くないからね。……なあ、こんなに密  
着してるんだ、親愛の証にキスなんてどうだい?」

「何をふざけたことを——っ!」

その言葉が終わるやいなや、ゼロは自らの『伸ばした』のだ。  
そのくちはまるで酸素マスク状になっており、瑠璃の顔面に  
近づくとカポツと口と鼻をふさいでしまう。

「や、やめ、離れなさい……うっっっ!!!」

触手の管で繋がっているゼロの口から吐息が吹き出された。  
それはやたら甘い香りがし。一息吸うだけで胸の奥がかあつと  
熱くなる。

(媚薬ガス——っ!! く、だめ、今は引きはがせない……！)

今ナイフから魔力を送るのを止めればもつと好き放題される  
のは目に見えている。ガスの吸うのを承知の上で呼吸せざるを

得なかった。

「こひゅーっ!! こひゅーっ!! う、ううく……!」

吸い込む度に肺から血液に取り込まれて。体中が燃え上がる  
ように火照っていく。汗そのものが催淫効果を持ったようで、  
肌が敏感になっていくのがわかった。

汗をたっぷり吸ったスーツが地肌に擦れる度にピリピリと甘  
い痺れが全身から押しよせてくる。

それはおへその下の機関、子宮に集約されて級きゅんと切な  
く疼いてしまうのだ。膣はすでにうねって愛液をはなちはじめ、  
ほころび始めた陰唇からこぼれだしてスーツに舟型のいやらし  
い染みを作り出している。

「もうこんなにぐっしり濡れているじゃないか……いけない  
娘だ……戦闘中だというのかわかっているのかな?」

そういうとゼロは股間から触手を伸ばし、スーツにペトリ  
貼り付いて透けてしまっている女陰に縁に触れた。

「はうううっっ!!!」

腰にビリビリッと電流が走る。快美な感電に思わず腰が砕け  
そうになった。そのまま布越しにラヴィアをなぞるように擦り  
立ててくる。

魔力防壁すら無効化する魔力を女陰に塗りたくられたのでは  
溜まった物では無かった。あつという間に股間が煮えたぎるよ  
うな灼熱の熱さに包まれ、甘い淫熱に焼き焦がされそうになる。

「もう溜まらないんじゃないかい? ここに——おまんこにぶ  
ち込んでほしいんじゃないのかい?」

「ふざける……なっ……! 私はそんな淫らな女じゃ、ないっ

……!」

素晴らしいながらナイフを抉る。快感に身体が流されそうになっっているのは事実だった。だが相手も弱っているはず。ここが勝負所だと信じて獲物を握りしめる。

「ぐつつつつ!!! くふう……。強情な牝にはこれが一番効くんだよ」

そう言いながらラヴィアをなぞっていた触手が膣口にあてがわれ、レオタードごと浅く中へと入り込んでくる。

「はううううううつつつつつつつつ!!!」

膣壁が硬柔らかく、熱い肉触手に穿たれて猛烈な悦楽を呼び覚ました。膣道は反射的に収縮し、侵入者の形を確かめるかのように喰い絞める。

「使い古された言葉ですが、『強気な娘にはアナルが効く』んですよ」

そう言いながら別の肉棒触手が尻たぶを割り、肛門括約筋の締め付けをこじ開けて腸内に入り込んできた。

「あ———つつつつつつつつ!!!」

お尻からわき起こる焼け付くような感触。脳みそに一瞬桃色の稲妻が炸裂し、身体がギクツと反り返った。

「ほら、ほら、キクでしょう?」

素晴らしいながら浅く膣とアナルに抜いては差し込み、抜いては差し込みの連打を繰り返す。

いつしか陰唇からはスツツからしみ出るほどの愛液がこぼれだし、尻穴からは腸液がまるで粗そうでもしたかのようにスツツに染みを作っていく。

「うおつつつつ!!! おつつ おつつ、おつつ!!!」

(だめええええつつつつ!!! 耐えなきや、だめなのがいい、魔力が……。身体が……。集中できないいいっ!!!)

「もうイキたいでしょう? これだけボクの息を吸って汁をすりつけられてるんだ。これだけ我慢しただけでも賞賛に値するよ。もう我慢しなくて良いんだよ?」

「いやつついやいやつつ!!! わらしい、まけないいいいいいいつつ!!!」

「そうかい、ならこっちはこっちで勝手にやらしてもらおうよ!」

「そう、れっ!!!」

その言葉を合図に、三本の太い触手が膣内に、別の太い触手がアナルを一気に奥で貫いた。

「ジュルルルルルルツツツ、ズボボオオオツツツ!!!」

「ひはあつつつ?! ひっきいいいいいいいい!!!」

一気に子宮まで、そして結腸まで貫き通された瞬間股間から爆発的な快感が炸裂した。それは全身隅々までくまなく行き渡り、意識を完全に粉碎する。

もう魔力を流し込むどころか、ナイフを握る事すら出来なかった。身体が反射的に背骨も折れよとばかりにのけぞり返り、舌を突き出して壮絶な絶頂感に悶絶する。

股間からぶじゃあああつつと大量の愛液がはなたれ、さらにプシツプシツと潮が吹き上がる。

「ボクの勝ちみたいだね。これで君はボクの物だ……!」

絶頂の海をたゆたう少女魔術師にはその声は聞こえていなかった——。



















内閣府特殊生物災害対策室のエージェントとして淫魔研究の疑いのある『村井重化学工業』の内偵調査のために三ヶ月前から学生研究員として桃ノ木愛理は入り込んでいた。

今時刻は午前23時。でっ上げた偽の残業でこんな時刻だ。人目が少なくなつた今がチャンスだ。とつづくに終わつていた作業のデータをバレないようにスクリーンを組んだ『まだやつて見せかけるダミー』に切り替えると、別の作業に取りかかる。胸の谷間から一本のUSBメモリを取り出した。外部記憶媒体の持ち込み、持ち出しが厳重なこの研究所でこれ一本持ち込むのもなかなか至難の業だったが、訓練を積んだプロである彼女にとっては不可能なことではない。

それを差し込むと、防衛省サイバー自衛隊の開発したクラッキングツールが立ち上がる。これによって愛理の権限ではとても参照できない高度な機密ファイルの存在が浮き彫りになる。更に見るのには苦労が行ったが、数週間前に抜き出しておいた柳主任のセキュリティコードを使うことでこれも突破できた。目の前にずらつと並ぶ機密情報の数々。多くは特許、財務、だが中にひとときわ堅固なセキュリティのかけられたファイルがあった。

(さてさて……)

しかしこれも自衛隊謹製のツールと愛理のテクニックで難なく突破。奥の門は開いた。そこに開示されたのは恐るべき研究の内容であった。

(……淫魔兵器……!? 淫魔に電子頭脳を組み込んでコントロールし、生体兵器として利用する……。なるほど、これは大物)

少し興奮した愛理は更に解析を進める。

(淫魔の生物的生命力と科学、化学兵器を合体させ、高度なAIで自律した戦闘兵器に仕立て上げる、もちろん命令の受諾も可能……なるほど実現すれば対淫魔戦闘も世界のミリタリーバランスも変わる。出来れば……の話)

正直なところ淫魔の生体は殆ど未知数に近い。各研究所が全力を挙げて調査研究に当たっているがわかつたことはほんのわずかに過ぎない。

(あまりにも危険な研究だ……。明後日実戦テストが行われる、か。それはぜ

ひ拝見したい物)

抜き取ったデータをメモリーに納めると、侵入の痕跡を一切残さずに全てをシャットダウンする。足跡が付くようなへまはしていないはずだ。USBメモリーを抜き取ると、胸の間に納めた。

(全ては明後日……)

愛理はにやりと不敵な笑みを浮かべた。

三日後、実戦テスト当日。愛理は全身を黒の光沢を持ったラバー地のスーツに包んでいた。彼女のグラマラスなボディラインが丸見えだ。腰には様々な電子機器や装備が取り付けられたベルトを巻いていた。それ以外は殆どボディペイントのようだ。

実験が行われるのは紳バイオテクノロジー研究棟物理衝撃試験室だ。試験室は一つの大きな体育館ほどの大きさがあり、実験を眺めるためのガラス張りの付きだした部屋がある。まずそこへ向かう。闇に紛れて音も立てずに目的の箇所へ到着した愛理は、ドアの向こう、室内に五、六人の気配を感じ取る。(まあ、実験が成功した良い夢でも見るんだな……)

そう心の中でつぶやくと愛理は装備品の中から無力化ガスを隙間から流し込んだ。しばらく中でうめき声が聞こえていたが、やがて静かになる。物音がしなくなったことを確かめると、愛理は首輪からコードを引き抜いてドアの電子ロック装置にクラッキングを掛けて、強制解錠する。ガスはすでに効力が切れており、愛理が入っても大丈夫だ。中には白衣姿の初老の研究員や背広を着たおそらくは『デモンストレーション』を見に来たであろう男達がそこかしこに倒れていた。

「では、特等席で観戦と行きましょうかね……」

そうつぶやいた愛理は窓際の堰にもたれかかるように意識を失っている男をどかすと、窓に張り付いた。

『実験を開始します』

コンソールからオペレーターの声が流れてくる。

それと同時にドアが開いた。『愛理の入ってきた』ドアが。

「!?」

素早く振り返るとそこには得体の知れない生命体が立っていた。大きさは愛理の二倍以上、高めの天井すれすれまで身長がある。全身はメタリックな装甲に覆われており、顔も仮面のような物をかぶっている。しかし継ぎ目から中身が見て取れた。腐ったどす黒い肉のような物がみっちり詰まっている。筋繊維のように細い肉が束になっていたり、丸々太い肉の所もある。そして何よりもこの怪物の正体を雄弁にかたるのは背中から伸びてくる無数の触手であった。吸盤の付いたたこのような触手、イボが無数に付いた棍棒のような物、はたまた軟性メタルで覆われたうねり狂うドリルのような触手。

「淫魔兵器……!」

愛理はぎりつと奥歯を噛んだ。

【そのとおりだよ、政府の牝犬君】

「!?」

オンになりっぱなしのコンソールから声が聞こえてくる。どこか機械音声じみた声だ。

「誰だ!」

【誰だ、はないだろう。こつちから見れば君の方が侵入者だ。だがまあ、名乗るなら『ゼロ』とでも言っておこうか】

「ゼロ……!」

愛理は内心で驚愕した。様々な人間と淫魔が組んだ淫魔犯罪に荷担している、各治安組織でもトップクラスの最重要指名手配人物だ。

「この研究も貴様がそのかしたの?」

そういうとクツクツと笑い声が聞こえてきた。

【そのかした、とはいつてほしくないねえ。私は人間達の求めに応じて材料を提供しているだけさ。人間の欲にはキリが無い。こちらが良い稼ぎになっているよ】

「だまれ! 人の心の隙間につけ込み欲望を煽るその手管、知らないとしても

思っているの……!」

【私につけ込まれるのも人間が欲深いからさ。今回の件に関しても淫魔兵器を作って軍事シェアのトップに立ちたいという欲望があったからだ。私はそれにちよつと協力しただけ】

「くだらないご託はたくさん! 姿を見せたらどう!」

再びクツクツという笑い声が聞こえ、

【今日の所は遠慮しておくよ、お客さんも大勢招待しているしね。別の場所から君とそいつ、ああ、『A』っていうんだがね、そいつは、そいつの実戦テストを拜見させてもらおうとするよ。さあ、やれ、A】

ゼロの声と同時に、Aは触腕を伸ばした。

「くつ!?」

すかさず腕をクロスしてガードするが、受けきれない。吹っ飛ばされて背面の効果窓ガラスをぶち破りながら物理実験室へ突き落とされた。

「へっ!」

体がバラバラになるような痛みが走る。かなり野高所からの落下だったを受け身には成功してそれまでのダメージではなかったが、触腕で殴られた腕の骨が折れそうな程に痛んだ。

割れた窓からAが飛び降りてくる。ずしん、途実験室の頑丈な床に着地した怪物はフシユと不気味な息を吐いて身構え、触手をうねらせる。

「やるしか、ないようね」

そういうと愛理は腰に着けた装備ベルトを引きちぎった。

「錬成!」

そう一声高く叫ぶと、霊力を変換して両手に小さなブロックを積むようにして巨大なガントレットを生み出された。両手にすぽとはまり、二の腕までもガードする。そして足や腰にも同じようなレガースが生み出された。見た目は銀のような鈍い光沢を放っており、明らかに固そうなのが。指先はワキワキと動きグーパーを繰り返しているところを見ると銀でも鉄でもない何か未知の金属に思われる。



ヴァアチヴァアチヴァアチっ!!

「ひぐっ!! んぐああああ!!」

強烈な突き刺すような刺激が乳房全体に降り注ぎ、思わず拘束された身体をのけぞりかえらせてしまう。一瞬感じたのは痛みであったが、すぐにそれは甘い痛痒感に変わった。乳芯が痺れる様な強烈な甘痒さに愛理は身を揉んだ。更に追撃の電流が流れてくる。今度はパッドとスーツの間から蒼白いスパークが見えるほど強力な電流だ。

ピリヴァアチヴァアチヴァアチ!!

「ぎゃうんっっ!!!」

声がひっくり返るような悲鳴が喉から迸る。乳房に流された電流は通常の電気とは違うらしく。確実に愛理の性感を刺激してきた。まるで乳房の真意直接電流を流され、快感神経の束を刺激されているかのように乳房が気持ち良くてたまらない。

さらに電撃が断続的に右、左、右、左を順序立てて流し込まれてきた。

「ひみやっ!! ひんぐうっっ!!! んおおおっっっ、んっひいひいっっ!!」

その度に生体電流に直接介入する淫電流は的確に乳房全体を快楽の稲妻で焼き焦がし、トロトロに溶かしていく。スパークが炸裂する度に乳房の中の快感神経が強烈に刺激されて上下に胸が勝手に跳ね上がってしまう。誰の手に揉まれているわけでもないのに揉みしだかれているかのようにであった。

電撃は止むことを知らない。今度はランダムに電流を送り込み。右ばかりかと思えばいきなり左。という変則的な責めを加えてくる。

「あっひ!! あひい!! おごおっ!!」

(む、むね……おかしくなる……! へんだ……! 焼けるよう……!)

対象が刺激に慣れてしまわないようにする丁寧な配慮に身構えることも出えず、予想外の電撃に乳房を甘く焼かれてその度に顔をそらしてのけぞりかえらせてしまう。身体全体もビクンビクンと大きく動いてしまい。その度にたわわな乳房がブルンブルンと上下に揺れた。

幾度となく電撃を喰らった乳房は今や熱せられた溶鉱炉のような状態で、

快美の熱がドロドロに溜まって中で渦巻いている。気持ち良くて溜まらず、もし両腕が自由なら自分で採みしだいてしまったかもしれない。

股間からは更に愛蜜が量を増し、スーツの給水容量を超えた分が糸を引きながらつーつーと垂れ落ち始めていた。愛理の身体が弾ける度に振りまかれる仄香る甘酸っぱい汗と相まって、周囲に熱気と淫らな臭いが充満していく。

淫気が満ち始めた実験室内で触手兵の責めは更に加速していく。今度はピンピンに勃起した乳首と乳輪にパッドが取り付けられたのだ。

(い、いませこ、電気ピリピリされたらあ……!)

胸でさえもあれだけの快感刺激なのに、極点である乳首にまで刺激を加えられたら溜まらない。何とか振り落とそうと身をもがさせるが、乳首の形がわかるほどにピツタリ張り付いたパッドは外れる気配を見せない。そういうしているうちに、とうとう肉豆めがけて快感の電流が降り注いだ。

ピバヴァアヴァアヴァアヴァアヂイツツ!!!

「んひいっっっっっ!!! んおおおおおおおおおお!!!」

しこりきつた乳首と乳輪に電撃が落とされ、乳首が焼け焦げてしまうのは無いかと言うほどに強烈な熱さと痺れが襲いかかってくる。それはすぐに甘すぎる疼きに変貌して乳塔を刺激した。更に何度も何度も降り注ぐ電撃に、乳首が内側から電流でメチャクチャに揉みしごかれているような強烈な快感が炸裂する。

「ひうううんんん!!! おご、おぐううううっっ!!!」

ひとたまりも無く愛理は乳首だけで絶頂に送り込まれてしまっていた。給水容量を超えた股間部の布地からびゆるっ、びゆるると白く濁った本気の愛液が飛び出していく。

乳首に電撃が落とされる度に愛理は乳を振り乱し、乳首を痙攣させて、全身をも弓なりにしならせて感じ入ることしか出来ない。

だがこれだけで責めが済むわけではない。今度は乳房に張られた電極パッドと乳首の物が連動して肉鞠全体を電撃責めにして来るのだ。





た愛理の意識はどうとう真つ白にホワイトアウトした。股間からじよろろろ……と尿がこぼれだし、愛理の全身から力が抜ける。それでも時折壊れた人形のようにビクンビクンと跳ね返ってはいたが。メガネの下の目は完全に白目を剥いている。

しかしそれでもプログラムされた動きを止めない触手兵。命令しか受け付けないマシンの恐ろしさであった。

【よし、Λ。マシンモード停止。】

ゼロからの命令があつてようやく触手兵は愛理を放した。

「あうぐう……」

うめき声を上げながら自分の作った愛液と尿の池に顔面から突っ込んで倒れ伏す。全身はビクビクと震え、一切力が入らなかつた。もう立つとも出来ない。

（くひよお……くやし……！）

機械と融合した新たな淫魔とはいえここまで怪異に好きないようにされたのは初めてだ。屈辱に脳が沸騰しそうになる。

（チャンスさえ…… あれば……こんな奴……）

二度目があれば必ず勝てる。そう思う愛理ではあつたが、相手ははセカンドチャンスを与えるつもりなど内容だつた。

【どうだつたね？ ハイテクを駆使した新世代の淫魔とのセックスは。私にもわからないが最高だつたようじゃないか。実験はまずまず成功という所だろうか】

「ふざけ……るな……。私はまだ……屈服して……ない……！」

そう自分に言い聞かせるように放つた愛理は自らの体液で汚れた身体を起こし、無理矢理両脚に力を入れて立ち上がり、構えを取つた。しかし足は生まれ立ての子鹿のように震え、ガントレットに包まれた握り拳も弱々しく、戦える状態でないのは明白だつた。

だが心は折れていない。退魔のエージェントとしての使命感が屈服を許さない。なんとしてでもこの淫魔兵の情報を生きて持って帰らねばならない。

そのためにはさらなる陵辱をも耐え抜く……！

しかしそんな健気抵抗でも淫魔にとつては絶望へ至らしめる最高のスパイスだ。機械越しの音声でも喜色を隠しきれない様子で命令する。

【結構結構。まだそれだけの覇気が有れば、次のモードにも耐えられるだろうな……？ Λ、『淫魔モード』】

ゼロがコマンドを入力すると、触手兵は新たな形態を取り始めた。体中に貼り付けられていた装甲が中に圧縮されていたらしい何らかの気体をブシューと放出しつつ大きく隙間を拡げ始めたのだ。メタリックな装甲板に隠されていた体表面があらわになる。

それは殆ど触手の束で構成されており、肉体と言えるような箇所はかなり少ないようだつた。これでは打撃技は殆ど通用しまい。銃弾の効き目だつて怪しいだろう。それでもフェイスプレートだけは外さないのは一応『兵』としての体面を保つためか。

（こんなのじゃ……分が悪すぎる……）

今の自分が戦える状態ではないことをさつ引いても打撃技主体の愛理では勝ち目は薄かつたかも知れない。それでも退魔エージェントはファイティンポーズを取つた。

（なら打撃の効きそうな顔面を……！）

あれだけ連続で絶頂させられていたのが嘘のようなキレでフリッカーを放つ。しかしいくら常人離れた愛理の精神力に支えられたとはいえ、完全な状態の攻撃とはほど遠かつた。案の定触手兵の頭は首も触手なのか、ぐにやりとあり得ない方向へ曲がつてやすやすとかわしてしまふ。

「くっ……！」

それでも諦めず、スーツが身体をしゃぶる感触で軽い絶頂に導かれそうになりながらも攻撃を止めない。そんな哀れな戦士に引導を渡すべく触手兵が動いた。足の触手を十本ほど床すれすれに鞭打つように放ち、愛理の足をしばき上げたのだ。

ビシッ！

「あっつ!!」

よけることもかなわず、愛理の錬金術で作られたレガースに包まれた足にクリーンヒットした。両脚をなぎ払われるようにはたかれ、思わず尻餅をつくようにして転倒してしまふ。そのまま無数の触手が防護鏡に絡みつき、両脚を大きく広げさせてしまつた。

「くっ……また……しても……!」

また犯される——。そう悟つた愛理はガントレットに包まれた両手で必死に触手を引きはがそうとするが無駄な努力だつた。

そうこうしているうちに殆ど触手体となつた触手兵が肉繩の束となつて愛理に迫つた。軟体となつた身体を活かして床を這うように高速で襲いかかつたAは、身体の大部分をあつさりと戦闘少女の下、彼女をまたがらせるようにして潜り込んできてしまふ。

「うっ、うっ……!」

お尻に当たるヌメヌメした硬柔らかい感触に思わず顔をしかめる。

改めて触手兵は太い肉繩でレガースごと愛理の足を巻きしめると、大きくM字開脚を強いた。陵辱の余韻さめやらぬ股間は戦闘中にも漏らしていた愛液のせいで女陰がくつきりと透けてしまつている。陰唇の膨らみ具合から膣口の収縮具合まで、まるでボディペイントかと言わんばかりにあらわになつていた。

そこに触手兵のおそらくは股間から伸びてきたのであろう触手が愛理を突き上げるようにしてあてがわれた。反射的に下半身を見やると、今度はいかにも生物っぽい物が底にはあつた。

形状は男性器によく似ているのだが、カリ首が十段以上はある。そして表面はうっすらと甲殻類の様にエナメル質の何かでコーティングされており、ある程度の堅さを持つことが想像できる。太さは先ほどの機械ドリル触手に劣らないほどの極太で、愛理の太股ぐらひはあるのではないだろうか。長さは予想も付かない。

「う……」

愛理はゴクリと生唾を飲んだ。あんな物で犯されたら、またよがり狂つてしまふ——!

(ダメ、耐えるの、愛理。ここで負けることだけは、避けるの……!)

ギョツと唇を噛み、体中を強ばらせて挿入に備える。

かたくなに抵抗を続けるエージェントを突き崩すべく、触手は蠢いた。その巨体からは想像も付かぬほどのスピードで一気に陰唇を割り、膣口を限界まで押し広げ、膣壁を無数のカリ首で掻き擦りながら子宮口をぶち破り子宮内部まで貫き通す。

メリメリメリメリッ、ズズンンッ!!!

「かっは……! お、おおおおおおおおおううううううううううううう!!!」

骨盤が砕けてしまふのではないかという衝撃と共に、愛理の身体が一瞬ふわつと浮いて再び沈み込んだ。体中がバラバラになりそうなほどの強烈な快感衝撃が全身を走り抜け、有無を言わずエージェント少女を絶頂へと突き上げてしまふ。満々と膨らみきつた豊乳が振動に揺さぶられてタプンと大きく上下に揺さぶられた。

そして極太肉触手は本格的に愛理を墮としにかかる。

子宮まで貫いた極太触手を目にも止まらぬ早さで引き抜いていく。

ズルルルルルウツ!

「ひぎゅうううううううううううううううううううううう!!! し、子宮ひきじゅりだしやれるうううううう!!!」

何十段もの巨大でエラの張つたカリ首に子宮の内側を引っかかれ、内臓期間ごと引きずり出されるのでは無いかと言ふほどの衝撃が走つた。しかしそれが溜まらないほど気持ち良い。エラが子宮口に引っかかる度にゴツゴツと固い肉の輪を弾かれてお腹の中がビリビリ痺れる様な強烈な愉悅感が走り抜ける。それはあつという間に全身へと周り、脳天を真っ白に蕩けさせた。ガントレットに包まれ両手が不規則にグーパーを繰り返す、タイツに包まれた両脚指がレガースの底を掻く。

入り口付近まで引き抜かれた極太肉棒は先端まで引き抜かれる直前に再び













の方から全て抜け出ていった。

ターゲットを殲滅した触手兵はもう興味は無い、といわんばかりに精液で池が出来て居る床に愛理の身体を無造作に放り投げた。

どべぢゃあつ……。

「ぐべええええええ……。ふひいいいいつつつつつつ……ひはあああああああつ……！」

白目を剥いて白濁の池に沈み痙攣することしか出来ない愛理。そこにゼロの声が降りかかった。

【正直ここまで耐えるとは予想外だったよ。よく頑張った君にご褒美をあげよう。触手兵だがね、すでに人間と協力して量産体制に入っているよ。機械側のデータについては君の健闘を祝して詳細を上げようじゃないか。もともと淫魔部分はこの私にしか作れないから対処のしようも無いだろうがね。もつとも、君がここから歩いて出て行ければの話だがね。それでは、また機会があつたらあおう。はーっはっはっはははは……】

(ぜ……ろ……！ あなただけは……かならず……！)

汚濁にまみれた敗残の少女エージェントはその名を深く刻み込み、ようやく許された一時の休憩に意識を沈ませていった――。



「安らかにお休みなさいっ背教の徒！ エイメンっ！」

内閣府特殊生物災害対策室のエージェントでありながら神に仕えるシスターでもある高坂真利愛は叫びながら両手に持った銃を乱射した。

全く狙っていないように見えてその実射撃は正確で、一発毎に雑魚淫魔が倒れていく。

「おーほほほ！ 神の御許に送って差し上げますわー！」

少なからずトリガーハッピーである彼女はとにかく銃を連射した。弾の消費も早い。あつという間に弾薬が尽きた。

「ちっ！ 銃がなくても拳がありますよ！」

弾の切れた銃を放り捨てた真利愛は黒手袋に包まれた手につけた十字架の刻印入り聖なるナックルで淫魔を撲殺し続ける。しかしそれにも限界はあった。

「はあはあ……何匹沸いて出てきますの!？」

倒しても倒して沸いて出てくる。流石のエージェントシスターにも疲れが見え始めた。その好きを見逃す淫魔ではない。素早く触手を放ち腕を絡め取ってしまう。

「あう！」

一度動きを封じてしまえば後はなし崩しだった。両腕に触手が絡み、両脚にも巻き付く。そして異形の者達の知能は無いが異様な馬鹿力で持つて宙ぶりに吊されるようにして拘束されてしまった。

漆黒と濃紺で彩られた戦闘用修道服に包まれたシスターの豊かな肢体が揺れる。

今までさんざん銃で撃たれたお返しとばかりに、淫魔達は白

濁弾を放ち始めた。びゅぷつ、びゅぷぷつ、どびゅっ!! 「あうっ！ あつ、ああっ!! 穢らわしいっ！」

媚薬効果を含んだ白濁粘液弾が体中に降り注ぎ、あつという間にエージェントシスターの身体を白くネットリと染めていく。神聖なる加護が施された戦闘修道服だったがその効果も無く媚薬の効果は布を抜けて肌に染み渡ってきた。やがて体中の感覚が敏感になり、粘液弾でたわわに実った乳房をびちゃっど打擲されると、それだけで軽い絶頂に達してしまう。

更にその粘液を良くまぶそうと乳房に触手が絡みついてくる、根元からぶら下がる乳房に汚濁液を擦り込む様に揉み込まれればこらえがたい疼きが乳悦となつて真利愛の身体を責さいなむ。

股間は黒のホットパンツ状のパンツに包まれていたが、そこにじんわりと淫らな染みができはじめていた。それを見逃す淫魔達ではない。無数の同胞を殺された偉業の者達は仕返しとばかりに異様な触手を生み出した。巨大な漏斗状になっている触手である。その先端部を真利愛の陰唇を割り、膣内を貫通し子宮にまで突き刺してくる。そしてその漏斗にびちゃびちゃと媚毒白濁液を溜め始めたではないか。自然、濃厚な催淫効果を持った液体が子宮に流れ込んでくることになる。

「うあっっっあああ……熱い、ですわあ……くうう……！」  
子宮から膣までを強烈な毒に冒されて真利愛の身体が官能の炎に包まれる。白濁粘液弾に身体を撃たれる度に絶頂し、愛液を噴き出してしまふ。

だが真利愛の淫獄はまだ序章に過ぎなかった。







よい愛液を大量に出すと言うことで、真利愛は高位淫魔『ゼ口』に献上されるべく彼らの巢へとお持ち帰りされた。

もちろん引き渡されるまだただ黙って拘束されるだけなわけもなく、おぞましいまでの淫拘束がシスターを待ち受けていた。

そこはとある研究所の一室だったが、素手辺り一面には触手はビッシリはわされており、そこがすでに魔界に堕ちている事を示していた。

その部屋の肉壁に両腕を大きく横に拡げさせられ、両脚も股関節が外れてしまうのでは無いかというぐらいに大きく開脚させられた上で埋め込まれた。形としては宙で『土』の字を描くような格好である。

「くっ……こんな格好……!」

おおよそ人間としての尊厳を全て否定するかのよう屈辱的な格好である。愛液を垂れ流すだけの肉奴隷で良い。そういった宣言で有るようにも思えた。

そしてそれに沿うように、先ほどの磔処刑触手に負けず劣らずの超極太肉触手が真利愛の股にねじ込まれていた。膣口はぺったんこになるまで押し広げられて拡張され、子宮は限界まで拡がって本来なら子を宿すはずの箇所を肉詰めになされている。

先ほどまでの肉槍と違ったのはこれが高速でピストン運動を仕掛けてくることであった。子宮が外に出してしまうのではないかというほど子宮口をひっかきながら外に出ると、また暴走したトラックの勢いで子宮の多くに激突する。

「おっっっっっっっっっっっ!!! んごおおおおお

おっっっ!!! んふおおおおおおお!!!」  
その度に戦闘修道服に覆われた腹部が胸元まで盛り上がった。

両手両足が完全固定されているため衝撃が一切逃げない。骨盤を碎かれんがばかりの衝撃が腰骨に走り、それは甘美すぎる痺れとなって全身を震えさせる。

股間から愛液をどばあつと垂れ流して絶頂するしかない。

股間の超極太触手は高速ピストン十回に一回は大量の射精を行った。もちろん超強力な媚毒性分の精液である。それが腹の中、子宮が破裂寸前の水風船になるまで膨れあがってお腹が異様な膨れあがり方を見せるまで注ぎ込まれているのだ。子宮から濃厚な淫毒が体内に取り込まれ。全身の感度が百倍、二百倍と倍々ゲームで上がっていく。

更にアナルにも巨大な触手がぶち込まれていた。こいつは射精するだけではなく、直腸を越えて結腸、小腸、大腸から胃までを媚毒で汚染しつつ食道を駆け上り、口から体内を貫通して飛び出してしまっていた。

（ぜ、全身どころか身体の内まで穢されてええええっつ、神よ、神よおおおつ、わたくしを、お救いくださいませえええっつ）

しかし彼女の信じる神は無慈悲で、淫獄は果てなく続く。  
シスター真利愛は数千度目の絶頂に身を震わせながら届かぬ祈りを繰り返した――。





政府の求めに応じて深山から降り、エージェントとなった退魔の巫女御門静音。その初戦となるべき戦いは生物ラボで発生した淫魔ハザードの対処であった。淫魔化した馬や牛があふれる研究所に単身織り込んでいく。静音も神道退魔流の術を尽くして闘ったがまだ実戦経験の薄い巫女にとっては荷が重すぎる任務であった。

闘いやすいよう身体に密着するよう改造された純白と漆黒で彩られた改造巫女装束ごと淫裂を濡れてもいないのに淫魔馬の超極太で触手でぶち抜かれた。

「んおおおおおっつ…!!!」

しかし静音の纏う神気でも中和できない淫気のおかげで感じたのは痛みではなくて壮絶な快樂だった。腹をスーツごと突き上げられる度に壮絶な快感が全身をバラバラに粉碎するほどの勢いで駆け抜けていく。更に媚毒射精まで喰らって胎内をパンパンにされて絶頂する。退魔エージェントの巫女は完全に敗北した――



馬淫魔に犯され抜いて戦闘能力を失った巫女エージェントの次なる相手は、淫魔化した牛であった。その体軀は異様なまでに巨大で、一軒家の屋根程までは身長がある。

触手逸物も股それに似合った超極太で、静音の胴体ほどはあろうかという大きさであった。

触手で細い胴を鷲づかみにし、その超弩級極太触手を無理矢理小さなおまんこに埋め込んでいく。その様はまるでオナホールを使っているようであった。

「おおおおおおお——っっっっっ  
さっけ、さけるうううっっっ 儂の身体真つ二つになるうううっっっ」  
そして身体ごと上下に揺すぶられる。その度に極太逸物が腹を突き破らんがばかりに子宮内壁を押し上げ、漆黒の巫女スーツごとお腹が胸元まで突き上げられる。

そんな責めでも感じてしまい、おぞましい淫拷問絶頂に身を震わす。巫女少女の初陣は陰惨な結果に終わろうとしていた。



身体に貼り付き豊満なボディラインを露わにする漆黒のライダーズーツに身を包んだ黒髪の美女エージェント、朱鷺羽瑞穂<sup>ときほみずほ</sup>。彼女は愛車の大型バイクを駆って各所に同時発生した淫魔を退治していたが、ふとした油断から濃厚な淫気にまどわりつかれ愛車が淫魔と化してしまった。触手と化したバイクのタイヤが乳首にはまり、勃起を強制してくる。まもなく乳突起はビンビンにそり立ち、淫液にまみれたタイヤで乳首をなぞられる感触だけで絶頂するほどになる。

さらに股間には大型のスパイクタイヤを思わせるようなタイヤ触手がぶち込まれていた。膣内を高速回転で抉りながら。子宮内部をも擦り上げる。

「ああおとおおっっっっ おお おっっっ」

成熟した大人の女性だけが持つ濃密な色気を振りまき、黒髪を振り乱してイキまくる瑞穂。歴戦のエージェントである彼女であっても耐えがたいほどの壮絶な快美感と絶頂の前に、なすすべも無くメスに変えられていた。



完全にグロッキーになった瑞穂はもう淫魔バイクの思うがままだ。ライダースーツの美女エージェントはバイクの座面に跨がらされた。シートにはピストンを横したような彼女の頭ほどはある超極太触手が生えており、当然それを飲み込まされるハメになった。形状通り強烈なピストンで子宮を抉られ、背も折れよと身体をのけぞらせて発情汗を振りまきながら絶頂する瑞穂。

淫魔バイクはなんとそのまま荒れた路面を走行したのである。

「んひっっ…ひいひいひっっ…」  
右に左に車体が傾き、段差を乗り越上げたりする度に膣や子宮の思いも掛けないところが抉られてその度に予測できない絶頂が襲いかかってくる。

かといってこの高速で走っている淫魔バイクから振り落とされては死は免れまい。滑稽だとわかっていてもハンドルを握らざるを得なかった。死の恐怖と隣り合わせに送り込まれてくる快感は股格別で、ダメだとわかっていても絶頂してしまう。淫らなツーリングは燃料が尽きるまで続く――。

淫魔と人間の間に産まれた数奇な宿命を持った少女、それが**神百合亜**だった。彼女は生まれ落ちたときより特殊な能力を授かっていた。念動力。サイコキネシスとも呼ばれる力である。彼女の力を欲した政府は彼女を監視下に置き、内閣府特殊生物災害対策室のエンジニアとして採用した。以来彼女は愛用のゴシッククロリータ様式の密着スーツに身を包み、特殊能力を持って淫魔と戦い続けていた。

そして今日の相手は全身が粘体で覆われたスライムであった。淫魔を研究しているところある生物実験室から抜け出し、淫気を吸って巨大化した物らしい。なるほどその大きさはやや小柄な百合亜の身体を丸ごと飲み込めるほどであった。

「……気色悪い……。早く死ね……」

百合亜は得意のサイコキネシスで武器としていた鋼鉄の礫を弾丸として高速で発射する戦法で闘ったが、属性が悪かった。コアの部分を狙えば良いとわかっているのだが、粘度の高い体表面に飲み込まれて届かないのだ。

「くっ……弾が通じない……これじゃどうしようもない……」

そうこうしているうちにスライムの方が反撃に出た。まずは厄介な手を潰さんとばかりに粘塊を両手に向かって投げつけたのだ。びちゃっ、びちゃあ！ 超能力を持つ以外には普通の少女に過ぎない百合亜にそれをかわすことは出来ず、紫の手袋に包まれた両手が粘塊に飲み込まれてしまった。「うっく……あ、熱い……?」

スライムはそのものが高度に濃縮された媚毒で出来ているらしく、手袋にしみこんで皮膚に触れた瞬間強酸で焼かれたような刺激が走った。しかしそれは決して苦痛ではなく、未知の気持ちよさであるのが恐ろしかった。

スライムは手を包む粘塊の中で渦を発生させ。十指をネットリとマッサージしている。

「うっう……ああ……」

指先がどんどん敏感に、感じやすくなっ  
ていくのが自分でもわかった。生暖かい水流に舐られる度にゾクゾクするような心地よさが走る。全身の毛穴が開き、仄香る発情汗が噴き出してしまふ。

さらにスライムは粘塊を手のように伸ばして、淫魔とのハーフのためか同年代の少女より相当にグラマラスで巨大な美爆乳を

ぎにゅっと揉み潰してきた。根元からくびり出され、ロケット状に絞り出される両胸。そこを媚薬の塊であるスライム触手に何度もこね回されるのだから溜まらなかつた。ゴスロリレオタードのカップから乳房がはみ出るほどに強く強いじめられる。

「あっ……あああ……っ……おっ……」

たちまち乳首は勃起して周囲の乳暈までぷっくり膨らんでしまふ。ピツタリとボディペイントのように素肌に貼り付いたタイツのおかげでそれが丸見えだった。

股間もとろりと愛液をこぼし始めてしまふ。それを敏感に感じ取ったスライムはねじった棒のようにした触手をバツクから百合亜の淫裂に突き立てた。

「はうん……!! あっ、はあああ……!」

一気に子宮までも貫いた触手は我が物顔で百合亜の胎内を蹂躞する。媚毒で出来たスライムは一突きで超能力エンジニアを絶頂に導いてしまった。

「ああおおおお……くっ……、こんな程度で……私は……負けない……」

クールという韜晦の仮面をはぎ取るべくスライムは更に蠢く。



今度は体位を変え、スライムはウォーターベッドのように床に厚みを持って拵がった。その上にすっかり脱力した百合亜を乗せる。

「あっ……あああ……？」

するとズブズブとエナメルのごシツクブーツにつつまれた足がスライムの中に沈んでゆく。

結局空色のタイツとブーツに包まれたむっちりしたおみ足は大腿部まで飲み込まれてしまい、結果として百合亜はスライムの腹に跨がっているような格好になってしまった。

紫の手骸に包まれた両手もしっかり粘塊に取り込み、抵抗と能力を封じることがもたれない。このため腕は多少後ろに引っ張られる形になり、ロケット状に突き出した豊満すぎる爆乳は前方に突き出すような形になっていく。

スライムが狙ったのはまずその爆乳だった。先ほどまでの媚毒スライム触手揉みですでに敏感になっていくところに、スライムが渦巻きのような水流を作って両脇から挟み込むように揉みたててくる。

「ふあああああああ……!!!

お、おっぱい、痺れる……!!!」まず感じたのは乳芯を激しく震わせる震動であった。快感神経の束を直接水流に挟られていくかのような気持ちいい疼きが生まれ、全身を駆け抜けていく。

さらに押し潰すかのように両脇からぎゅうううと乳肌を圧迫され、無数の柔らかい丸ノコの刃のような物に連続で抉られれば指でムニムニと高速で押し込まれているような刺激が走る。

「あっあふ……んく……んおおお……あうう……!!」

(きもち……いい……いけない……集中……できない……)

実際の所手は別にあつてもなくても能力は使えるのだが精神力の集中が出来ないとコントロールが出来ない。乳悦に悶えっぱなしの今では無理な相談だった。

さらに巢霊夢の水流に弾かれてなお押し返すような弾力を見せる生意気おっぱい緒をいじめるべくさらにスライムが動く。

空色のタイツ越しにボディペイントかというほどにくつきり透けている大きめの乳首と乳暈。そこに丁度電動マッサージャーのヘッド部分のような円筒系の粘塊が乳暈

と乳首を押し潰すかのように強く押し当てられる。そして見た目通りに高速振動を始めたのである。

「ひっっっっああああああ

あ!!! ひぎっっっっいいいいいい……っっっ!!!」

完全に勃起して敏感過ぎるほど敏感になつていた乳首が高速振動で縦横無尽に震わせられまくる。乳首がもげてしまいそうな乱暴さだが、恐ろしいほどの悦感波動が乳首からわき起こる。乳暈まで丁寧に責めさせられるともう十度二十度と絶頂してしまつて股間から愛液をプシプシと吹き出させてしまう。

その股間ももちろんスライム淫魔の魔の手の中にあつた。百合亜が跨がっている座面に当たるところから大きなくびれを持つた固く変形したスライムが伸びてくる。太さは少女の握り拳ほどはありそうだ。

それが一気に子宮まで貫いた。レオタード越しに腹がボコリと膨らむのが見える。太く、固い触手に膣壁と子宮内壁を抉られて百合亜はなすすべも無くまた一段高い絶頂に追い上げられていく。



「おはあつああんんつつ……!!! ひぎいい  
いうううううんんつつつつ……!!!!」

絶頂の海を漂う超能力美少女エージェン

ト。そんな彼女をさらに辱めるべく、スライムは更に百合亜の身体を自分お腹へと取り込んでゆく。結局百合亜は完全に粘塊の中に沈む格好になってしまった。

口元部分だけはホースのような空洞があてがわれ呼吸だけは確保している。流石に殺す気までは無いようだったが、このまま絶頂地獄とさらなる責めが始まればどうなるかは怪しい物だった。

そしてスライムは手中にしたツインテール美少女を完全に墮とすべく蠢いた。腔内に埋め込みっぱなしの固い触手を一旦軟化させると、今度はまるで液体のようにじゅ

ぽぽぽと子宮内に入り込んできたのである。おあああああああ……!!! あ

がつつつつ……おうあああああ……!!!」

（お、おなかのなかああああ……満タンに……!!!）

子宮はあつという間にスライム詰めきれ子宮は限界まで内側から押し広げられ

た。百合亜のレオタードとタイツに包まれたおなかをまるで臨月の妊婦かと見まごうばかりに巨大に膨らむ。

更にその中にスライムのコアが無理矢理に挿入された。

ゴリ、ゴリリツツ!!!  
「ひんぐうううううつつ……!!!  
あが、んほつつおとおお……!!!」

コアはまるで卵の如く固く、腔内を抉りGスポットを掻き擦って腔道を通する度にあまりの快感に目の前でまばゆいフラッシュが何度か炸裂する。

さらにPスポットを刮げつつ子宮内部にゴリつと入れれば、もう意識が吹き飛びそうなほどの爆裂的悦感が炸裂する。

それが更にアナルにまで行われた。腸壁が固い卵に削られる度に脳裏で火花が打ち上がる。スライムの中に濃厚な濁った愛液と腸液が浮かび、混ざり合っていく。

空気を入れて膨らませたような百合亜のお腹は前後からのスライム卵挿入によってデコボコと金平糖のようにいびつな形になっていた。

更にスライムに沈む興奮で更にワンサイズはアップした美巨乳に水流が絡みつく。

ぬか壊れるまで終わらないのだ。

根元からねじり上げるように右上、左上に引つ張り上げられ、乳房が根元からちぎられてしまいそうな感覚を覚える。しかしそんな軽い痛みでさえも今は快感のスパイスにしかならなかった。

乳房が荒っぽくねじ揉まれる度に乳芯を

とろかすような甘い衝撃が迸り、乳芯をどろかして絶賛稼働中の溶鉱炉の鉄のように熱く説かしていく。

さらに乳首と乳量までをも渦巻き水流に責め立てられれば稲妻のごとき鋭い快美果敢がわき起こって乳芯に突き刺さる。

それだけでは済まず、紫色の手袋に包まれた五指の一本一本までに水流が絡みつき、漆黒のエナメルブーツの中ではタイツに包まれた足指までもが丹念に愛撫を受けている。



キ  
キ  
キ

## Staff

● Writer

高橋良喜

● Illustrator(敬称略)

DON

masa

きづかかずき

スンドレぽん

トコビ

鈍色家電

●発行所

Palette Enterprise

HP <http://www.palette-e.com/>

E-Mail [anq@palette-e.com](mailto:anq@palette-e.com)

●印刷所



2016年8月14日：第一版

コミックマーケット 90

## For Writers

●高橋良喜

というわけで女スパイ、エーエージェント物でした。いいですね、女スパイ。永遠のロマンだと思います。本当はジョーカー・ゲームリスペクトなんでもっと渋井のやってみたかったような気もしますが私の能力ではここの変が限界です。というか実はもっと大量に文章書いてたんですけどページ数制約でなくなく切り捨てたり……。

そんな苦勞も詰まったこの本、楽しんで頂ければ幸いです。

それではまた次回！

- 本書は18歳未満の方の閲覧をお断りしております。
- 本書の内容はあらゆる犯罪行為を肯定、助長する物ではありません。本書に記されている内容を実行した場合、犯罪行為となる恐れがあります。
- 本書の内容に関する権利は全て PaletteEnterprise が有しています。無許可での再配布（ネット上へのアップロード、対価を伴わない共有行為、交換行為を含みます）を禁じます。また、著作権法に定められた例外以外での複製は禁じます。該当事実を確認した場合、刑事法的処罰の請求、民事法的損害賠償の請求を行う可能性があります。
- 落丁、乱丁については当サークルに在庫がある限り対応致しますが、在庫切れの際にはご容赦下さい。



# Palette Enterprise.

